
正義の味方を目指した『殺人貴』

眠れる英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の味方を目指した『殺人貴』

【ISBNコード】

N8467Z

【作者名】

眠れる英雄

【あらすじ】

これは、一人の少年の物語。誰よりも『正義の味方』に憧れながら、誰よりも『殺人貴』に近かつた男の物語。そんなガラスのような少年は、何処に向かうのか　　「言つただろ？　俺が……『殺人貴』だ」

シキはさ、どんな大人になりたいんだ？

眩い日差しの中で、彼 ナギ・スプリングフィールドに訊かれる。

その笑顔を、その強さを、決して失いたくないと。

こんなにも世界は美しいのだから、今この瞬間の幸せが永遠であつてほしいと。

そう思つから、誓いの言葉を口にする。

今この気持ちを、いつまでも、決して忘れずにおきたいから。

俺はな、正義の味方になりたいんだ

「…………うん？ 夢か…………」

暖かい日差しに照らされて、俺は半分寝惚けたよう呟いた。日の傾きが、先ほどと比べてだいぶ差がある気がする。

俺は寝転がっていたベンチから身体を起こすと、寝惚けた頭を回転させるべく思考の海に潜る。

俺の名前はシキ・クライスト。今年で確か13歳になる。今はフリーアの傭兵で、確か雇い主の~~なま~~は

「む？ 向じやシキ、もう田を見ましたのか？」

後ろから声をかけられる。振り返ると、そこには両手にソフトクリームを持った俺の今の雇い主 アリカ王女がいた。

「…………アリカ。買い物は終わったのか？」

「何を言つておるか。お主のせいで休憩しておったわ

そう言つて渡されたソフトクリームを受け取ると、アリカも同じように俺の横に腰かけた。

「しかしさ……何が護衛だよ。完全にお前さんの荷物持ちじゃねえか

そう、今日の俺の仕事はコイツの護衛だった。本来なら今日は昨日の疲れを癒すために一田中で寝ていいつもりだったんだが……。

「何か文句でもあるのか？ 護衛はお主の仕事じゃろ？ が

「荷物持ちは仕事じゃねえよ。」

俺は怒鳴るよつて言いながら、ソフトクリームを食べていく。疲れた身体に染み渡る甘さが、身体を癒していく。

「てかよく普通に買えたな？ お姫様がこんな所にいたら驚くだろ普通」

「？ よくわからんが、何でも『デート』とやらでサービスらしいぞ？」

「……おい、ちょっと待てやコイ」

誰と誰がデートしてんだよ。

チラシと向こうでソフトクリームを作っている屋台のおじさんを睨むと、どうごうわけか満面な笑みでグッと親指を上に向けたままこちらに腕を突きだしてきた。

……違いますよおじや ん！ 僕とコイツはカップル何かじゅありません！ ただの依頼主と傭兵の関係です！

「といふでシキ。『デート』とは何じゅ？」

「知るか。王宮の奴らこでも聞いてる」

「むへ、こつたい何なのじゅ……？」

不思議そつに首を曲げるアリカの様子を見て、思わず苦笑する。

本當なら、俺はコイツの側になんかいてはいけない。俺みたいな何万人の命を奪つてきた『殺人貴』が、こんな平穏を感じてはいけないはずだ。

アリカはみんなの『光』の存在だ。その笑顔が人を、国を元気にする。俺みたいな『闇』が側にいてはいけないのだ。

……いつたい俺は、どれほどの命を奪つてきたのだろうか？ 少しでもたくさんの人々に笑つていて欲しい。そんな、馬鹿げた理想を胸に走ってきた。

十救うために一を殺し、

百救うのために十を殺した。

千を救うために百を殺し、

万を救うために千を殺した。

彼らは悪いことなんか一つもしていない。ただ、そこにいただけで死んだのだ。

……俺の、この手のせいです。

『そこにいたお前たちが悪い』、なんてことは言わない。悪いのは全て俺なのだから。

結局俺は誰も救つてなどいない。少しでも犠牲が少ない方を切り離しただけ。自己満足で殺しただけだ。

そう、だから俺は『正義の味方』などではない。

俺は『悪』であり、『殺人鬼』であり、そして

「……おいシキ、聞いておるのかシキー。」

「つあ？」

耳元で聞こえた声に、俺は意識を覚醒させる。横を見ると、アリカが心配した顔付きでこちらを見ていた。

「大丈夫かシキ？ 急に黙つたと思ったら、何やら複雑そうな顔をしていたが……」

「……『イツに心配されていゆよ』なら俺もまだまだだな。」

俺は出来るだけ無理な笑みを浮かべると、心配そうに見つめてくるアリカの頭を強引に撫でて、

「大丈夫だつづの。それに、お前に心配されるほどヤツになつた

覚えはねえよ

「な、や、止めるのじゃシキー。頭を撫でるのではないツー。」

撫でる手を振り払おうとするアリカの攻撃をかわすと、横に置いてあつた荷物を手に取りアリカに向かつて笑いかける。

「ほら、行こうぜ？　久しぶりの休田だ。何処までも付いていってやるぜ、お姫様？」

「……当然じや。お主は妾の騎士なのじゃから」

アリカは一瞬恥ずかしそうに頬を赤くしたが、やがて差し伸べていた俺の手を握り締めた。

「俺は騎士じゃないんだけどな……まあいいや。ほら、次は何処に行きたい？」

「む、次は向こうなじびじや？」

「へいへい、了解つと

そうやって手を繋いでまま歩く一人。その後ろ姿はまるで

……確かに俺はコイツの側にはいられない。

だから、俺は待とう。

コイツを、救ってくれる人が現れるまで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8467z/>

正義の味方を目指した『殺人貴』

2011年12月26日21時08分発行